

松本慎一・西川正身翻訳「フランクリン自伝」岩波文庫・岩波書店 1957年1月7日刊を読む

共同図書館

1. このころ私たちのクラブの集会場は、居酒屋ではなく、グレイス氏の家の小さい一室をとくにそれに当てていたが、ある時私は次のような提案をした。
2. (1)「各種の問題に関するわれわれの論文の中には、各自の蔵書が引用されることが多いから、集会の場所に本を全部持ち寄って、必要に応じて調べることができるようにしたら便利だろう。
(2)こうしてみんなの書物を集めて共同図書館を作っておけば、われわれに一つところにまとめておくつもりがある限り、その間はめいめい他の会員全部の本を使用する便利がえられ、めいめいが全部の本を持っているのとほとんど変わらず有益だろう。」
(3)この案は一同の気に入って賛成をえた。そこで私たちは、一番手放してもよいような本を持ち寄って、この室の一隅に集めた。冊数は期待したほど多くはなかった。この文庫は非常に役に立ったが、適当な管理ができなかったために不都合が起り、約一年後には解散になり、めいめい自分の本を持ち帰った。
3. (1)さて私は初めて公共の性質をおびた計画に手を出した。すなわち組合図書館の計画である。
(2)私が草案を作り、この町で著名な公証人ブロックデンに頼んで定款に作成し、ジャントー・クラブの友達の援助によって五十名の組合員をえた。
(3)組合員は最初に一人につき四十シリング、以後は組合が存続する予定である五十年間、毎年十シリングずつ出す規則であった。その後、組合員が百名に増加したので、法人にする許可をえた。
4. (1)これが今日各地に行われている北アメリカ組合図書館の元祖である。私たちの図書館そのものも大したものになったばかりか、なおも膨張しつつけている。
(2)アメリカ人全体の知識水準を高め、平凡な商人や百姓の教養を深めて諸外国のたいていの紳士に劣らぬだけのものに仕上げたのは、これらの図書館である。
(3)また思うに、全植民地の住民がその権益を擁護するためにあのようにこぞって抗争に立ち上ったのも、幾分かはこれが影響によるものであろう。

P114 ~ 115

<コメント>

アメリカ建国の父、ベンジャミン・フランクリン自伝をじっくり読んでみると、現代日本社会でもチャレンジすべきことがたくさん見つかる。その一つがこの「共同図書館」。地域創生の切り札として、テレワークセンターとしての「共同図書館」を挑戦課題としてはどうか。

— 2021年7月1日林明夫 —